

石垣島の台湾系島民の日本語

— 1話者のケース・スタディー —

ダニエル・ロング、張 守祥、張 愛慶、石坂 真央、今村 圭介、塚原 佑紀、田中 節子

1. 序論

本稿では、沖縄県石垣島に暮らす数百人の台湾系島民によって形成されている言語コミュニティの言語使用状況を概説した上で、その背景にある社会言語学的な要因を考察し、さらに石垣島の台湾系島民が話す日本語の特徴をいくつか取り上げた。2006年10月に、日本語および閩南語による「半構造化インタビュー」(60~90分程度)を行なった。後日、仮名漢字混じり文で文字化した。注目すべき音声学特徴があった場合ルビをつけた。本稿では調査を行なった人の中から、1人のデータに注目し考察を試みる。

台湾系島民が使用する言語変種として閩南語と日本語が挙げられるが、後者が標準日本語と異なる点は主に2つある。一世の話者には第一言語(閩南語)の影響と思われる中間言語的な要素がある。一方、調査に協力してくれた台湾系島民が話している日本語はウチナーヤマトウグチである。なお、このコミュニティの中で北京語の話せる人は少ないし、石垣島方言もほとんど話せないと言う。興味深いことに、小笠原諸島の欧米系島民の言語コミュニティに見られるような混合言語はなく、日本語と閩南語を使い分けているのである。二世の中には、台湾留学などによって閩南語を身につけた人もいる。石垣の中では台湾系島民の経済的・社会的地位がけっして低くないこと、スピーチコミュニティとしての団結力が保たれていること、そして独自のアイデンティティに誇りを持っていることなどがこの言語維持の背景にある社会言語学的な要因として挙げられる。一世の日本語には、閩南語の影響によるとと思われる音韻論的特徴が目立つ。話者によって、ナ行またはダ行に[n]音が変異的に用いられている。

沖縄県の石垣島では500人あまりの台湾系島民が「スピーチコミュニティ」を構成して暮らしている。一世には戦前に日本語教育を受けた人もいるが、日本語を自然習得したものが多。

本稿で紹介するデータは2006年10月9日に行なわれた調査のものである。インフォーマント(被調査者、以下Q氏と呼ぶ)は77歳(調査当時)の女性である。1929年に台湾に生まれた。9歳から国民学校に入ったが、二年だけで退学した。16歳で、石垣に家族と住んだことのある台湾人と結婚した。1949年に長男を負んぶして、夫と一緒に宜蘭県蘇澳から閩船に乗って与那国を経由して石垣にやってきた。1962年に申請した日本国籍が二年

後に認められ、日本名に変えた。子供の閩南語能力レベルは年齢順に下がっていく状態である。家の中で夫と閩南語を使うこともあったため、1人目の子供(男性)は閩南語を理解することができる、話すのは恥ずかしいという「消極的バイリンガル」である。2人目の子供(長女)は閩南語が少し分かるが、話せない。3人目と4人目(次男、次女)以降は聴解能力すらない日本語モノリンガルであると話している。

Q氏は、石垣に数十年間住んでいるだけに、流暢に日本語を操っている。一方、標準日本語と異なる談話の特徴が多く見られる。Q氏の日本語はほとんど自然習得によって身につけられたものであるため、これらは中間言語に起因すると考えられる。一方、Q氏が暮らしている地域(石垣島)の非台湾系住民も東京で使われている日本語とは異なることばが生活言語として用いられるので、これらの特徴は石垣の地域共通語(ウチナーヤマトウグチ)とも考えられる。以下では、より際立った特徴をいくつか取り上げ、その原因を探る。

2. 呼称について(張守祥担当)

コミュニケーション活動における呼称は一般に自称表現、対称表現、他称表現の三種類が含まれるはずである。しかし、30分の談話データには対称表現は一回しか見られなかった。従って、今回は考察対象を自称表現と他称表現だけにしぼることとする。なお、自称表現はQ氏が調査者の前で自分自身に言及する言い方であるのに対して、他称表現はQ氏が調査者との対話の中で親族構成員に言及する言い方である。

2.1. 先行研究

標準日本語の自称表現については、大西(1992)は(A)姓の呼び捨て、(B)人称代名詞、(C)親族名称、(D)親族名称+人称代名詞、(E)その他の五つに分けられるとしている。簡月真(2006)は台湾の閩南語話者が母語からの影響を受けて、日本語親族名称を使用する場合は、一人称代名詞以外に、閩南語の一人称代名詞を多用する傾向があると指摘している。小森由里(2008・2009)は日本人の親族内部の自称詞・他称詞形式が明らかにされている。しかし、台湾に隣接する石垣島の台湾系島民の呼称表現—自称・他称表現の特徴については誰も触れていない。本研究ではそれらを解明したい。

2.2. 自称表現

調査者はQ氏とは親戚でもなく、友人でもない初対面の人間関係なので、一人称代名詞以外の使用はほとんど見られなかった。使用傾向を見れば、使用回数の一番多いのは「う

ち」である代わりに、世間でもっとも常識化されている「私」の使用は2位で、「自分」は3位である(表2-1)。

「うち」「私」「自分」の意味が同じように見えるが、Q氏は話題の重み、内容、相手との心理的距離、発話当時の心境だけでなく、文法的制約にも応じて使い分けている。まず使用文脈を見れば、「自分」の使用は下記の「連体修飾語用法」と「自分+で+動詞」との形式に限定している。例の(1)(2)(3)が「自分+の+名詞」の形式を以って話し手自身に所属するものを示すのに対して、(4)(5)話し手自身の動作状態を示す。

表2-1 自称表現

自称形式	使用回数
うち	27
私	21
自分	7
お母さん	1

- (1)家は自分の家じゃないさ、借り手がいる。
- (2)でもこれも自分の運命だからしかたないと。
- (3)私、自分の親でなかったわけ。
- (4)畑行って、野菜とって、あんなで自分でやったよ。
- (5)あのとき九歳、自分(で)起きて。

次に、Q氏が聞き手との間で一定の距離をおきながら、重要な話題(例えば、個人の悩み、嬉しいこと、辛い体験)について改まって提起したり、説明したりする場合、フォーマルな「私」を用いる。

- (6)私もよお、・・・今まで本当にもう、苦勞ばかり重ねているさあ。
- (7)8人落第して、残り65名で、私が二等の優等もらったわけ。
- (8)私、関節が悪いの。これ、みな、みんな、腫れてるしよ。
- (9)お父さんも無学だから・・・私に勉強させたら財産売られてしまうってよ。

反面、リラックスしたムードの中で、さほど重要ではない話題について提起する場合、「うち」の使用が多くなる。使用形式には「うち」「うちなんか」「うち+親族名称」「うち+の+名詞」などがある。そのうち、(13)や(14)では「の」を挟まない「うち+親族名称」が用いられる。標準日本語では使われないこうした表現は、Q氏の母語である閩南語でも、沖縄方言やウチナーヤマトウグチでも可能なので、その影響ではないかと考えられる。

- (10)だからうちはもう、この草がよ、石に抑えられて、石取ったらもう元気になったと同じ(おんなじ)さ。
- (11)ブローカの人頼んでから、うちなんかつれてきたわけ。
- (12)うちなんか使ってる台湾語でもよ、あれ本当・・・福建省の言葉らしいんだよ。

- (13)だからうち次男もよ、本当におとなしい人さ。
 (14)うち親父もよ、高砂と一緒にもう友達になって……。

2.3. 他称表現

小森由里(2009)によると、親族どうしの他称表現として主に親族語彙、名前、指示語の三種類が使われる。そして、親族どうしの場合には通常、聞き手の視点からみた親族語彙が使われる。今回のデータでは、調査者がQ氏一族とは無縁の人であったが、それでも親族語彙が使われている。それは表 2-2 にみられるように、話し手視点からみた親族語彙である。

表 2-2 他称表現

他称形式	使用回数	他称形式	使用回数	他称形式	使用回数
親父(夫)	14	長男	7	伯母さん	3
親	3	お兄さん	4	奥さん	1
お父さん	11	長女	4	三男	1
お母さん	5	次男	4	孫	1
伯父さん	8	弟	3	女房	1

話し手視点からの他称表現は主に下の世代(子女)、同世代の下位者(弟妹)、上世代の親概念に集中し、下記の(15)(16)(17)のように対称表現になれないものが多い。一方、第三者視点からの他称表現は、使用例の(18)(19)のように、子女の視点を採用するものもあれば、(20)のように、同世代の兄弟視点に同調するものもある。更に(21)では息子の嫁を他人として扱い、社会一般人視点からの「奥さん」を借用して言及する。

- (15)それから、次男と三男がよ、一銭もよ、取ってないよ。
 (16)弟もよ、8月頃に電話きてから、なんか「今年来ないのー」って。
 (17)私相当、小さいときからさ、……あの育ての親だからよ。
 (18)親父お父さんの田圃と伯父さんとよ、これがよう、なんか分離してないわけさ。
 (19)私の人生はよ、みんなうちよ、女房が(に)めちやくちやにされて。
 (20)いや、いいよ、もう、(弟を指す)あんた、孫、嫁もらう時に行くよ。
 (21)あとはもう失敗して、奥さん(長男の嫁を指す)も離婚して……。

2.4. まとめ

以上、談話データにおける呼称表現について分析した結果、先行研究では扱われていない石垣島台湾系島民の日本語自然習得者の呼称表現を明らかにすることができた。話し手が赤の他人を聞き手にする場合、一人称以外の自称表現は使いにくい。しかも一人称の使

用は千篇一律ではなく、話し手が談話の性質、物事の所属関係などにに基づき、自分流にきちんと使い分けていて、標準日本語に一致するものもあるし、一致しないものがある。また、話題にのぼる人物、即ち親族構成員に言及する場合の他称表現として、通常の指示語と名前の使用が制限され、人物の捕らえ方も通常の聞き手視点が難しく、話し手視点、第三者視点の二点だけとなることが分かった。

3. 「あれ」について(張愛慶担当)

石垣島台湾系島民の日本語自然習得者のデータから「あれ」の使用が良く見られた。今回の37分のデータからも「あれ」の表現が53回現れた。平均して42秒に1回の頻度で現れることである。この表現は日本語母語話者の高齢者にも頻繁に使われるものであるが、今回の話者は年齢に加えて、自然習得者である点も関与していると考えられる。日本語学習者の「発話ストラテジー」と「高齢者のことば」の両方の観点から分析を試みる。

3.1. 発話のストラテジー

日本語学習者は日本語での発話のなかで何らかの問題に直面した際、何らかの方法でそれぞれの問題を解決してゆく。大野陽子(2004)は中級前半の日本語学習者の発話のストラテジーについて、コードスイッチ・逐語訳・一般化・パラフレーズ・造語・言い直し・非言語・不確かさの表明・間接的アピール・直截的アピール・相手の理解確認などと11項目に分類している。今回の分析対象表現である「あれ」は、大野陽子(2004)の分類で一般化に相当するものである。さらに今回のデータからその役割ごとに、代用の「あれ」・前置の「あれ」・指示代名詞の「あれ」・その他などと4項目に下位分類をした。

① 代用の「あれ」

ここで取り上げた「あれ」の使用役割のなかで最も多く見られた。ことばが思い出せない時や分からない時に「あれ」を代用して用いるものである。なお、(→)の解説の部分については次の節で触れる。

- (22)ブローカーのあれ(→入国手続き)頼んでから
 (23)家もコンクリーの大きいのを作ってあれ(→判断不可)してからわけよ。
 (24)歌手も呼んで、歌なんかもあれして(→演奏させて)からよ、もうそれみんなやられているさ。
 (25)もう血がもう、あれして(→出て、出血して)もう。

¹ 大野陽子(2004)の「発話のストラテジー」の分類と定義による一般化の定義は言葉が思い出せない時により一般的な言葉を用いると述べている。

(26) こっち切ってから、もう血があれして (→止まって、止血して) から、治っ・・・
あれしてから

(27)これは忘れないよね、自分のあれ (→母国語) だから。

(28)どんなにして、あれしたら (→調べたら) わかるかなあ。

(29)ズボンなんかも長くつけないよみんな膝上まであれして (→ずっこける、ずり落ちる) から

② 前置の「あれ」

前置の「あれ」の場合は、代用の「あれ」と違ってQ氏が表現した言葉が「あれ」の使用後に現れる。ことばを知っているが率直に出てこないため意図した表現を言う直前に「あれ」を使用するものである。

(30)そして長男は少しは、あれけど、話すのよ

(31)こんなによ、大きくあれしてさ、腫れとった

(32)向こうであれ結婚してから、それからお兄さんがもうすぐこっちに来ているから。

(33)やっぱしよ、あれよ、上等よ、高砂よりも、

(34)長女の息子があれして送って来ているから。

(35)お父さんお母さんがあれで馬鹿正直な人間だから。

③ 指示代名詞の「あれ」

指示代名詞のあれを次のように定義づけられる。すなわち、「空間的・時間的または心理的に、自分からも相手からもへだたっている物または場所を指示する語。今の話題とは離れているが、その名を示さなくても相手にそれと通ずる人や物事を指示する語。」である。こうした使用が次の(36)~(38)に見られる。なお、(37)のように、ソ系の指示詞と混乱している例もある。

(36)麻で作った、あのよ、買ってからよ、お父さんがあれでズボン作って、

(37)大根ね、塩漬けて干したの。あれだけ刻んで

(38)すぐ怒るよ、リンパツさんが。本当もうみんなあれのこと怖いさ。

④ その他

驚いたときに用いる感動詞の用法で用いられた表現が例(39)に見られる。例(40)の「あれさ」は単なるフィラー(間投詞)になっているようである。例(41)のように「アレ」を「あの人」の意味で使うのはウチナーヤマトウグチの特徴である。

(39)こう待ってるときは、あれって思う

(40)うち、ほんとあれさ三歳の時から

(41)だから、うちもあれにほめられたよ。

3.2 高齢者が頻用する「あれ」

辰巳格(2001)は次のように述べている。

高齢者には、会話中、『あれ、それ』などの代名詞を頻繁に使う人がいる。極端な場合には、『あれが、あれして、あれだから……』となり、意味不明になることもある。単語が思い出せないのが、代名詞で代用しているように見える。

Q氏は1929年生まれで、調査当時70年代であったので辰巳格の言う「エイジングことば」を使用していた可能性がある。しかし、非母語話者がストラテジーとして使用する「あれ」と、母語話者の高齢者が単語を思い出せない場合に使用する「あれ」との間に明確な線が引けない。そもそもエイジングことばの特徴として指摘される「あれ」は使用程度と関わるもので、若い母語話者に見られない行動ではない。

一方、高齢者の「あれ」が気になるのは、日常的な単語の代用として使われる点にある。それに対し、非母語話者による「あれ」の頻用が一つのストラテジーとして認められているのは、知らない「高度」な単語の代わりに使われるからである。

さて、例(22)~(29)で「あれ」が代用している単語はどの程度非母語話者にとって「難しい」日本語なのであろうか、検討してみよう。本稿の紙幅に制限があるため、例文の文脈が分かるのに必要な長文の引用を載せることができないし、また、プライバシーへの配慮という意味でも長い引用を避けている。それゆえ、例(22)~(29)の意味が不明瞭にみえるが、筆者が(22)~(29)の「あれ」が代用している単語を判定した。その結果が(→)の括弧に記した。

8例のうち、少なくとも例(22)と(27)の「あれ」はやや高度(非日常的)な語彙を代用しているように思われる。そして(25)、(26)、(29)は、非母語話者にとってどういった表現を使えば良いかが思い浮かびにくい(想像)表現だと言えそうなのである²。よって、今回のデータにおける「あれ」の使用は、「エイジングことば」として考えなければならない用例は少なく、むしろ非母語話者のストラテジーとして判断できるものが多かったように思われるのである。

² 日本語母語話者にとって(血が)「出た」とか「流れた」は簡単な単語に思われる。しかし、日本語習得論で重要なのは、非母語話者が「血」の話をするときにどのような動詞を用いるか(「血をした」、「血となった」、「血を出した」など)という問題である。つまり、「血」と「出る」がそれぞれ初級の単語だとしても、「血が出た」という表現はそうとは限らないのである。

4. 「でしょ」について (石坂真央担当)

4.1. 「でしょ」の意味と定義

「でしょ」での意味について三宅知宏(1996)と簡月真(2009)をもとに定義を行う。

A.推量:話し手の想像の中で命題を真であると認識するためのもの。B.確認要求:話し手にとって不確実なことを聞き手によって確実にしてもらうための確認を要求するもの。
 B-1 命題確認の要求:対象を命題の真偽とするもので、命題が真であることの確認を要求するもの。B-2 知識確認の要求:対象を命題によって表わされる知識(情報)とするもので、当該の知識を聞き手が有していることの確認を要求するもの。B-2-1 潜在的共有知識の活性化:話し手が情報的に聞き手との共有を見込んでいる場合のもの。B-2-2 認識の同一化要求:話し手が知識的に聞き手と共有を見込む場合のもの。C 新情報確認の要求:①聞き手が知らないあるいは分からないはずの情報を提示して、当該の情報の認知を要求するもの。②聞き手の調査者が知らない個人的なことに言及するとき。

表4-1.「でしょ」の意味と定義

A 推量			
B 確認要求	B-1 命題確認の要求		聞き手が知っている命題についての確認・同意
	B-2 知識確認の要求	B-2-1 潜在的共有知識の活性化	「誰でも知っている/分かる」と考えられる事柄
		B-2-2 認識の同一化要求	一部の人は知っている/分かると考えられる事柄
C 新情報認知要求			聞き手は命題を知らない

4.2. 台湾高年層の日本語との比較

ここでは、簡月真(2009)で観察された「でしょ」の使用数と比較し、考察を行う。

表4-2.「でしょ」の使用数

用法		推量	命題確認要求	知識確認要求	新情報確認要求	合計
使用数	簡(2009)	9	14	219	262	504
	Q氏	0	1	8	17	26

表4-2の結果から、簡月真が対象にした「台湾日本語」における「でしょ」の使用には、<新情報認知要求>の用法が多いことが特徴であることが分かる。そして、Q氏のデータにもこうした機能の発話が多く見られるが、同じ<新情報確認要求>でも細かい違いが見られる。

簡月真(2009:33)によれば、<新情報認知要求>は、単に新情報を会話に取り入れるだけでなく、そうすることによって、談話展開の機能を果たしている。

・・・「でしょ」の後続の文は「だから」「そして」など順接の接続詞で始まり、そ

の後談話が展開されていくことがわかる。「でしょ」を用いて聞き手に新情報を認知させた上で、さらに詳しい説明を広げていくという狙いがあると考えられる。

しかし、Q氏のデータには、こうした特徴が特に見られなかった。紙幅の関係で例を一つだけ取り上げることにする。

(42)私ね?私20年。1920年。あのときは国民学校^だけどお、もう戦争^だだからね。勉強よりも兵隊さんの、見送りが多い。でも田舎^でしょう?私相当、小さいときからさ、私、自分の親でなかったわけ。あの育ての親^だからよ。相当いじめられたさ。

この発言は、調査が始まって10分くらい経過した時点でのものであり、調査者とは初対面だったし、「田舎^だった」という情報を把握しているはずのない状況であった。明らかに新情報であるが、簡月真のデータに現れた順接接続詞がないし、話題の展開が見られない。

<知識確認要求>は、話題の導入によく使われる(三宅知宏1996)とあるが、簡月真(2009)やQ氏のデータでは、同じ用法を用いてもすべてにおいて話題の導入に頻りに用いられていない。ここから、<確認要求>の用法の拡張として<新情報認知要求>が現れたとも考えられる。

4.3. 終助詞「ね」と「でしょ」の比較

終助詞「ね」には、聞き手の反応を求める場合は上昇調となり、反応を求めない場合には、平坦、下降調となる傾向があり、反応を求めない「ね」の中にも上昇調の例が観察されるとある(森山卓郎2001)。杉藤美代子(2001)では<聞き手への確認要求>の場合は上昇調となり、<自己確認>の場合には、下降とともに上昇調も存在する。

「でしょ」の用法<新情報認知要求>に相当する「ね」の用法として、聞き手の反応を求めない<自己確認>を当てはめる。その結果、<新情報認知要求>のイントネーションには下降調の傾向が強い(13例)が、上昇調も表れた(4例)。「ね」の意味とイントネーションの特徴(森山卓郎2001)と同等の結果を得られたため、「ね」の代用として「でしょ」が使用されたことも考えられる。また、<新情報認知要求>の意味を持つ全文において、その文の後続の文が順接の接続詞では始まらないため、「ね」の拡張としての「でしょ」の使用が考えられる結果となった。

5. 「もう」について (今村圭介担当)

Q氏のインタビュー談話には副詞「もう」が、約30分の中で79例も出てきている。ここでは、「もう」に関して、母語影響の可能性の検討と、過剰使用から読み取れることを中心に分析する。

5.1. フィラーとしての「もう」の高出現率の母語影響

Q氏の「もう」の使用はフィラーとしての使用が79例中70例と圧倒的に多い³。また、Q氏が使用する様々なフィラーの中でも、「もう」の使用が他に比べ多い。その理由として、閩南語（中国語⁴）からの転移の可能性が考えられる。

吉田妙子(1997)では、中国語の「已經」からの転移で、中国人日本語学習者の「もう」の過剰使用の誤用を指摘している。中国語では、完了で日本語の「もう」にあたる「已經」が必ず使用されるため、中国人日本語学習者は日本語の完了表現でも、「もう」を不必要に使用してしまう。Q氏のフィラーとしての「もう」の過剰使用もそうした転移から起こる可能性がある。Q氏の談話でも転移によると考えられる「もう」の誤用が見られた。

(43)それだよ、3年の一学期になってからもう退学されたさ。

「～てから」はウチナーヤマトグチで動作の順序を表し、標準日本語の「～て」に当たる（次の第6節参照）。しかし、そこに完了の「もう」を共起させることはできない。完了に「已經」を必ず共起させる中国語からの転移として見る事ができる。しかし、Q氏の談話で、他に「もう」の明らかな誤用が見られず、中国語の母語転移があるか確定的なことが言えない。転移の有無を確かめるため、中国人日本語学習者と中国語以外の母語を持つ学習者との「もう」の出現数を比較した。

以下はポルトガル語を母語とする学習者と中国語を母語とする学習者での「もう」の使用数の比較である。データは国立国語研究所の実施した約30分間のOPIインタビューデータであり、被験者の性別は全員女である。

表5-1を見ると、学習者の言語レベルと共に「もう」の出現数が変動している傾向が見られるが、母語による出現数の差は特に目立たない事が分かる。Q氏の「もう」の過剰使用は特に母語干渉として考える必要がないと言えよう。

³ フィラーの認定は山根智恵(2002)を参照した。

⁴ 閩南語も北京語も「已經」を同じように使うため、ここではまとめて「中国語」として扱う。

表5-1. 中国語母語話者とポルトガル語母語話者のフィラー「もう」の使用数

中国語母語話者		ポルトガル語話者	
レイティング	「もう」出現数	レイティング	「もう」出現数
中級一下	1	初級一上	1
中級一中	4	中級一中	3
中級一上	6	上級一下	4
上級一下	1	上級一中	1
上級一下	22	上級一中	7
上級一中	20	上級一中	22
上級一上	34	上級一上	17
上級一上	4	上級一上	8
超級	8	超級	12
超級	8	超級	17

5.2. フィラーの使用から見るQ氏の日本語習得度

フィラーの使用傾向は日本語習得レベルに関わりがあると考えられる。Philips(1998)では、学習者のレベルが高くなるにつれ、フィラーの頻度と種類に多様性が出ることを明らかにしている。そのため、Q氏のフィラーの使用を、他の日本語学習者、母語話者のフィラーの使用と比較した。表5-2を見ると、Q氏は、他の話者に比べフィラーの多様性がないことがわかる。

表5-2. 中国人日本語学習者・母語話者・Q氏のフィラー使用数の比較⁵

	中級一中	上級一上	母語話者	Q氏
あの	1	98	63	11
えーと		4	2	
そうですね		15		
まあ		17	17	2
その	10	8	8	
んー	76	6	8	
こう	2	20	43	1
なんていうか		11	7	
なんか	52	6	25	3
あー	12	1	7	4
もう	3	34	11	70

Q氏の日本語習得度は高くなく、それが「もう」のみの過剰な繰り返し使用につながっていると考えられる。

⁵ 分析に使用した学習者の会話データは国立国語研究所(2009)、母語話者のデータは山根智恵(2005)を使用した。会話は今回の分析資料と同じ、30分程度の1対1のインタビュー会話であり、被験者は女性である。

(44)それからもう行って、ちったらもうこの医者がよ、もう、すぐもう、おしに出てるわけ。

同じ語句の繰り返し使用は、すぐに次の言葉が出ないためであり、文産出の能力の低さを表すが、言葉が思い浮かばない中で流暢に話しているように聞こえさせる、高度なコミュニケーション・ストラテジーであるとも考えられる。表5-2の中級-中の学習者は、「んー」や「あー」など音だけのフィラーを多く使用しているため、発話に間ができ、流暢に聞こえないが、上級-上の学習者、母語話者は、「あの」「こう」「もう」などのフィラーを多く使用し、発話に間を持たせず流暢に聞こえさせる傾向にある。つまりQ氏は、フィラーの多様性がなく繰り返しが多いことから、文産出能力が高くないことが分かる。しかし、フィラーの「もう」を多用するによって、発話が流暢に聞こえるので、高度なコミュニケーション・ストラテジーを身に付けていると言える。

6. 「～テカラ」について (ロング担当)

石垣島台湾系島民の日本語自然習得者が使う「テカラ」が気になる。その実態を見ると、「～テカラ」は約30分間で、38回以上使用しているの、口癖になっているとも言える。この表現はウチナーヤマトウグチにもあるが、この自然習得者の使用は果たして同じであろうか。その点を探ってきたい。

6.1. 標準日本語のテカラ

標準日本語の「～てから」は順接的因果関係 (A してから B) を現している。A が「未実現」で順接確定条件である。以下は、筆者 (ロング) が複数の文献 (大城朋子・尚真貴子 2007 など) を参照してまとめた「～てから」機能の分類である。

- (a) 結果の継続「〇〇が起きて以来」「首になってから、毎日が暇」=「首になる前は暇ではなかった」 英語: (ever) since
- (b) 条件「ご飯を炊いてから、学校に行かせてもらえた」(逆に「ご飯を炊いてからじゃないと学校に行けなかった」) 英語: after
- (c) 時間的順序、「駅に着いてから電話してください」=「駅に着いた後に電話ください」、
「×駅についてからじゃないと電話をしてはいけない」という意味ではない。英語: when

6.2. Q 氏の使用例 — 共起関係

インフォーマントの Q 氏の発話には次のものがあつた。

(45) 前よ、骨折してから、こっちでよ、ギブスし、7週間ギブスしとったよ。

(46) 〇〇先生、会ったわけ。で診察してからよ、肺炎と言って、で、10時ごろよ、薬飲ませてあれしたら、11時ごろに治ったよ。

(47) 「カサブランカ」と言ってから、あの、スナックなんかみたいとか、キャバレーみたいなのやって・・・

(48) 今まで本当にもう、苦勞ばかり重ねているさあ。してからよお。十、九歳のときに、国民学校入学したわけよ。

(49) 今はよ、原住民と言うわけよ。昔は高砂と言てから。(あー、はい。)ほんとよ、あの高砂かわいそうよ。

例(45)は順接確定条件と言えるので、標準日本語にもある用法と判断できる。この類はたった4例であつた(表6-1)。(46)のような「～てから」は、標準日本語としてはやや不自然(むしろ「診察して、肺炎と」の方が自然)だと思われるが、順接という判断は不可能ではないもので、9例あつた。(47)と(48)のような「～てから」は「順接」とは言えないので、標準日本語にはない用法であり、16例も見られた。(49)のように、発話末に「～てから」が来るのも順接とは言えない。この類は9例あつた。

表6-1 「～てから」の機能

分類	使用回数
(1) 〇順接	4
(2) △順接	9
(3) ×順接	16
(4) 発話末	9
合計	38

表6-2 の「～てから」表現に使われる動詞

接続動詞	使用回数
〇〇してから	4
あれしてから	5
。してから	3
動詞+てから	26
	38

表6-2で分かるように、(47)や(49)の「言ってから」のように「動詞+てから」は多くて、「あれしてから」の使用は5例、(48)のように文頭に来るのが3例で、そして(46)の「診察してから」のような「名詞する」が4例であつた。

6.3. 沖縄のウチナーヤマトウグチの用法

Q氏が使っている文頭のシテカラはウチナーヤマトウグチで頻繁に使われる談話マーカである。次の会話例(50)で使われているシテカラは標準日本語の「それで? どうしたの?」である。

(50) A: 風邪で試験受けられなかったさー。

B: して/してから、どうするわけ? 先生に理由、ちゃんと言った? (→それで? どうしたの?)

大城朋子・尚真貴子(2007:79-81)はこれ以外に、ウチナーヤマトウグチにおけるシテカラ

の5つの機能を挙げている。⁶

- ①継起 例：図書館に行ってから (→行って) 本を借りた。
- ②付帯状況 例：めがねをかけてから (→かけて) 新聞を読んだ。
- ③原因・理由 例：用があつてから (→あって)、行けません。
- ④道具・手段・方法 例：ペットボトルを使つてから (→使つて)、おもちゃを作った。
- ⑤並列 例：弟はよく食べてから (→食べて)、よく寝る。

ウチナーヤマトゥグチの「してから」、「してからに」は伝統方言の「サーイ」、「サーニ」に由来し(高江洲頼子 1994:275)、①～⑤のように標準日本語の「て」に当たるとされている。しかし、今回の閩南語母語話者 Q 氏が話す日本語では、「て」に訳せない例が多く現れている。これだけのデータで判断が難しいが、次の作業仮説を立てたい。すなわち、「テカラ」という表現自体は周りのインプットによって獲得したものだが、本人の中でこれが談話マーカまで発展した。

ロング・ダニエル、新井正人(2008)で、同じ石垣島台湾系コミュニティの別の話者に興味深い文法事項の使い方が見つかった。その話者の談話には「カラ」の汎用が目立ち、標準日本語のヲ、ニ、ト、デ、ハなどの代わりに使われていた。(使用例：「三男から沖縄におる。三男、高校の先生から。沖縄に行ってから、沖縄で嫁さん探しているから。)」一般のウチナーヤマトゥグチにおいて「カラ」の使用範囲が標準日本語より広いことが知られているが、その話者が話す日本語では、その範囲がさらに広がっているのである。

台湾系島民のまわりで話していることばは伝統的な琉球方言でもなく、東京で使われる標準日本語でもなく、沖縄版の共通語とも言えるウチナーヤマトゥグチである。標準日本語に比べ、ウチナーヤマトゥグチにおけるカラの使用範囲が広く、地元の日本人でも「学校カラ覚えた」(→デ)や「店の人カラ言われた」(→ニ)などの言い方をする(大城朋子、尚真貴子 2007)。一方、台湾系島民の談話に、「子供、大丈夫かなあカラ心配する」(→ト)や「欲しいの物カラ取って」(→ヲ)のような使い方が聞かれる。これは標準日本語でもウチナーヤマトゥグチでも用いられない文法事象である。標準日本語には「欲しい物を中カラ取る」のように類似する言い方が存在するがこの中間言語現象が発生した一つの原因と言えらる。しかし、カラのこうした意味拡大は、沖縄以外の台湾人日本語学習者には見られないことを考えると、地元の日本人話者が話しているこのネオ方言が台湾系島民の自然習得に影響を与えた可能性が高い。

⁶沖縄で使われている伝統方言と標準日本語との接触によって生じたネオ方言のことを本稿で「ウチナーヤマトゥグチ」と呼んでいるが、これは大城朋子・尚真貴子(2007)の言う「沖縄地域共通語」と同一のものを指す。

7. 文末詞について(塚原佑紀担当)

ここではQ氏の談話において、どのような文末詞が使用されているか概観し、その特徴をみる。その結果、文末詞「ね」よりも「よ」のほうが多く使用されており、一般的な学習者とは異なる傾向が見られた(なお、間投詞としての「よ」も「ね」より多く使用されている)。また、疑問を表す「ね」、標準日本語の用法とのずれが見られる文末詞「さ」、標準日本語にはない形式である「さね」が見られるが、これはウチナーヤマトゥグチの影響と考えられる。

7.1. 「よ」

ここで取り上げた文末詞のなかではもっとも多く見られる(90例)。文末詞の「よ」はその文が表す内容を聞き手が知っているべき情報として示す伝達態度を表す(日本語記述文法研究会 2003)とされる(例(51))。この「よ」は下降調である。

(51)それで1年のときに、あのとき一クラス、73人だよ。今の二クラス分よ。

また、間投詞としての「よ」も頻繁に見られる(例(52))。野田春美(2002)では、間投詞の「よ」は粗野な表現であり、あまり一般的ではないとされる。なお、この「よ」は平板調に聞こえる。

(52)だからよ、わたしがよ一、も、こんな自分がよ、なんでこんな運命かなって今も悩む。

7.2. 「ね」

文末詞「よ」に比べると非常に少ない(3例しか見られない)。学習者は「よ」よりも「ね」のほうを多く使用しているという報告がある(山内博之 2003)。文末詞の「ね」にはA話し手の認識として聞き手に示す用法B聞き手に確認を求める用法C聞き手を意識していることを示す用法があるとされる(日本語記述文法研究会 2003)。この談話で見られたのはAの用法であった(例(53))。

(53)今はよ、原住民というわけよ。昔は高砂と言ってから。(あー、はい。)ほんとよ、あの高砂かわいそうよ。みんな、山の、山奥におっぱらっていかれてね。

特徴的なのは、文末詞「ね」が疑問を表す例が見られることである。例(54)参照。この疑問を表す文末詞「ね」はウチナーヤマトゥグチでも使用されている(大城朋子、尚真貴子 2007)。

(54)調査者 生まれたのは何年ですか？

Q わたしね？

調査者 はい。

また、「よ」に比べると少ないが、間投詞としての「ね」も見られる(例(55))。

(55) あときは国民学校だけどー、もう戦争だからね、勉強よりも兵隊さんの一、見送りが多い。

7.3. 「よね」

文末詞「ね」よりも多く見られる。文末詞「よね」にはA聞き手に受け入れられると見込まれる話し手の認識を示す用法B聞き手に直接かかわることや、聞き手のほうが確かな情報を持っていると見込まれる事柄に対して確認を求める用法があるとされる(日本語記述文法研究会2003)。この談話で見られたのはAの用法であった(例(56))。

(56) ほら、歩くのもよ、ちょっと、なんかこけるでしょ。それ、もし何かあったらねー、そばに誰もいないと困るよね。

7.4. 「さ」

標準日本語と使い方が異なるものが観察された。標準日本語の「さ」は〈話し手が責任を持って断定せず、当然のこととして、あるいはとりあえずのこととして提示することを表す〉(野田2002:276)とされる。しかし、今回の談話では「さ」が付く文の内容について、Q氏が確実に知っている情報である例(57)、Q氏自身の経験を述べている例(58)が見られる。なお、このような文末詞「さ」はウチナーヤマトゥグチでも見られる(大城朋子、尚真貴子2007)。

(57) そして、もう、石垣にはおれないから、現在は内地のほうにいるさ。(調査者:あ、内地のほうに。)名古屋によ。もう、タクシー、持ってる。もう、タクシー持って十何年かな。

(58) わたし、自分の親でなかったわけ。あの、育ての親だからよ。そうとういじめられたさ。

7.5. 「さね」

標準日本語にはない形式であるが、よく見られる(例(59))。ウチナーヤマトゥグチでも使用される(大城朋子、尚真貴子2007)。

(59) 人からよ、畑買ってよ。あとき軍票だったさね、うん。54000円で買ったけどよ。

ここで、台湾系島民の日本語に見られる文末詞の特徴についてまとめておく。

文末詞「ね」より、「よ」を多く使う点が一般的な学習者とは異なる(間投詞についても

「ね」より「よ」が多く使用されている)。また、疑問を表す文末詞「ね」、標準日本語の用法とずれがある文末詞「さ」、標準日本語にはない形式である「さね」が見られるが、これはウチナーヤマトゥグチの影響と考えられる。このように、石垣島台湾系島民の日本語における文末詞(および間投詞)は当該地域の言語すなわちウチナーヤマトゥグチの影響が見られることが分かった。

8. 「わけ」について(田中節子担当)

Q氏の談話約30分間に60余の「わけ」が出てくる。その「わけ」の使い方は標準日本語の「わけ」の使い方とはかなり違っている。しかしウチナーヤマトゥグチで「わけ」に当たる表現と重なる部分もある。ここでは、Q氏の談話を検討しよう。

8.1. 実質名詞の「わけ」

実質名詞の「わけ 訳」の意味は3つに分けられる。以下の分類は寺村秀夫(1984)を元に筆者(田中)がまとめたものである。

- ① 事柄や言葉などの意味、内容。
- ② 物事の道理、筋道。
- ③ 事情や理由。原因やいきさつ。(どういうわけ → どういう理由・事情、わけをおしえてください → 理由をおしえてください。)

Q氏の場合は、こうした「わけ」を使っていない。

8.2. 形式名詞の「わけ」の定義と用法

寺村秀夫(1984:272-290)にしたがってムードの助動詞「わけだ」の用法を以下のように三つに分類する。

- ① ある事実・状況から論理的に導き出される結論を述べる言い方。「・・・ことになる」と言い換えることができる。(今はデフレだから、物価が安いわけだ。)

Q氏の談話にこれと同じような用法が二、三あるが、標準日本語ならば「の」に言い換えられるのであろう。

(60) あの時生徒が少なかったから、九歳になっても入れたわけよ。→入れたということになる、入れたのよ

- ② ある事実をある角度、観点からみるとこういう意味があるという言い方。(彼女は母の妹だ。つまり私の叔母であるわけだ。)

Q氏の中にこれと同じ用法が一か所あるが、標準日本語の「の」に当たる。

(61) あの時^は角糖^{じゃ}なくて、樽糖^{わけ}よね。→つまり樽糖^{よね}、樽糖^{なの}よ

- ③ 自分の主張が主観的にそう言っているのではなく、論理的な根拠があるのだと言うことを言外に言おうとする言い方。(落し物をして警察に行ったわけ、そしてら注意されちゃって。)

Q氏の中の残りのすべてがこれに該当し、「の」で置き換えることが自然である。

(62) もうお兄さんは病気だったさね。で、親父がお兄さんのかわりに、軍隊に行ったわけよ。

(63) あざがあると言うたわけよ。 →言うたのよ

8.3. ウチナーヤマトウグチからの影響

沖縄では標準日本語で「のだ」と使うところを「わけだ」で代用している。

ウチナーヤマトウグチ どこか行くわけ。

標準日本語 どこか行くの。(大城朋子、尚真貴子 2007:118)

Q氏はこのウチナーヤマトウグチの影響を強く受けているといえることができるだろう。

Q氏の「わけ」は標準日本語の「の」にすべて置き換えられる。寺村秀夫(1984:305-311)によれば助動詞「のだ」としての「の」は「わけ」「から」のように事実・状況と結論の間に強い因果関係がないという。

9. 結論

以上で見てきたように、石垣島の台湾系島民が話す日本語は、生活している地域で話されている日本語を自然習得した結果形成されたと言えるのである。つまり、(1) 閩南語母語であることに起因する中間言語的な特徴と、(2) (台湾系ではない) 石垣島民が日常的に話している石垣版のウチナーヤマトウグチ (または「ヤイマヤマトウムニ」、かりまたしげひさ 2009)、の両方の特徴を見せる。しかし、彼らが持つ言語体系はただ単に(1)の特徴に(2)のものが加わっただけではなく、二つの要因が複雑に絡み合っていることによって生じた特徴もある。つまり、(1)だけの場合 (例えば東京で日本語を自然習得した閩南語話者) にも見られない特徴、そして(2)だけの場合 (台湾系ではない石垣島民) に見られない特徴があり、標準日本語が使われていない地域における自然習得の複雑さが浮き彫りになっているのである。最近、台湾で日本語ベースのクレオール言語の記述と分析が進んでいる (真田信治、簡月真 2008) ので、これからこうした言語接触と言語習得の接点を求めた研究がなおさら重要になってくると思われる。

謝辞：以下の方々に御礼申し上げます。本稿で分析したデータが収集された2006年10月の調査に参加した馮秋玉、新井正人、中井精一、曾我部哲弥。2007年度首都大学東京大学院の日本語教育学演習の一環として文字起こしおよび問題点の検証を行なった塚原佑紀、彭韻、保坂希美、血脇洗寿、関峻泓、王威、磯野英治、王室、横川直子、張衛良、魯菲、神村初美。話者を紹介して下さった松田良孝と王田達夫。調査に協力して下さった芳沢佳代、国永かおり、曾根春子、王滝宇昌、東郷金子、玉木玉代 (以上敬称略)。なお、本研究は、木部暢子研究代表の「日本語諸方言イントネーションのデータベース構築と音調記述に関する研究」(基盤研究B)の科学研究費で行なわれたものです。

参考文献

- 大城朋子、尚真貴子 (2007)『日本語バイリンガルへのパスポート-沖縄で日本語教師をめざすあなたへ』沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会
- 大西智之 (1992)「日本語の自称詞と人称代名詞 —鈴木説再考—」『帝塚山大学教養学部紀要』30:26-46
- 大野陽子 (2003)「初級日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー—「発話のストラテジー」使用についての考察」三重大学国際交流センター紀要 5:55-65
- (2004)「中級日本語学習者の「発話のストラテジー」使用についての考察」三重大学国際交流センター紀要 6: 83-93
- かりまた しげひさ (2009)「琉球クレオイドの性格」(未刊原稿)
- 簡月真 (2006)「台湾高年層の日本語に見られる一人称代名詞」『日本語の研究』2.2: 61-75
- (2009)「台湾日本語にみられる「でしょ」の新用法」『社会言語科学』11.2:28-38
- 国立国語研究所 (2009)『日本語会話データベース横断調査編』
http://dbms.kokken.go.jp/judan_db/
- 小森由里 (2008)「自称詞に見られるスタイル変異—親族事例より」『日本女子大学英米文学研究』43:1-20
- (2009)「親族間で用いられる他称詞の分析」『第23回大会発表論文集』社会言語科学会 154-157
- 真田信治、簡月真 (2008)「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4.2:69-76
- 杉藤美代子 (2001)「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」『文法と音声IV』くろしお出版 3-16
- 高江洲頼子 (1994)「ウチナーヤマトウグチ —その音声、文法、語彙について—」『那覇の方言』沖縄言語研究センター研究報告書 3: 245-289
- 辰巳 格 (2001)「エイジングことば—あれが、あれして、あれだから」言語 30(13) 12-17
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版

- 野田春美 (2002) 「第8章 終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版、261-288
- 益岡隆志 (1991) 「終助詞「ね」と「よ」の機能」『モダリティの文法』くろしお出版 92-107
- 松田良孝 (2004) 『八重山の台湾人』南山舎
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111-122
- 森山卓郎 (2001) 「終助詞「ね」のイントネーション」『文法と音声』くろしお出版 31-54
- 山内博之 (2003) 「OPIデータの形態素解析判定基準の客観化・簡易化に向けて」『実践女子大学文学部紀要』45: 1-10
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィルター』くろしお出版
- 吉田妙子 (1999) 「副詞「もう」が呼び起こす情意性」『日本語教育』101: 61-70
- ロング・ダニエル、新井正人 (2008) 「台湾系石垣島民コミュニティの言語使用状況」『日本語学会 2008 年度春季大会予稿集』207-210
- 劉 秋燕 (2000) 「台語母語話者に見られる日本語歯茎音/d,n,r/の聴取傾向」『日本語教育』107: 85-94
- Philips, M, K (1998) *Discourse markers in Japanese: connectives, fillers, and interactional particles*. unpublished doctoral dissertation, Michigan State University, East Lansing, MI.

(Daniel Long・首都大学東京准教授)

(ちょう しゅしょう・首都大学東京大学院生)

(チャン エギョン・首都大学東京大学院生)

(いしざか まお・首都大学東京大学院生)

(いまむら けいすけ・首都大学東京大学院生)

(つかはら ゆうき・首都大学東京大学院生)

(たなか せつこ・首都大学東京大学院生)

OPI形式のインタビューデータから見る「が」及び「けど」類の使用傾向 —職場会話との比較—

丁 琳

1. 目的

接続助詞「が」「けど」類の意味・用法・機能に関する質的な研究は多く見られるが、量的に「が」「けど」類という言語形式の使用傾向を扱った研究は管見によれば三枝 (2007) しかない。ここでいう「けど」類とは、接続助詞「けど」「けども」「けれども」「けれど」のことである。三枝 (2007) では、話し言葉のデータを分析することによって、「が」「けど」類それぞれの現れ方の実際を検討し、相違があることを指摘したが、職場という場面における会話であり、話し言葉全般にあてはまるものとは言いがたい。本稿は、インタビュー場面のデータを用い、三枝 (2007) と比較することによって、計量的に両データにおける「が」「けど」類の使用傾向の差異を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

三枝 (2007) では、『女性のことば・職場編』(1997) と『男性のことば・職場編』(2002) を資料として、「が」「けど」類について調査を行っている。電話、打合せ、会議などのフォーマルな談話も多少含まれているが、この資料の大半は休憩時や仕事に入る前の雑談などのインフォーマルな談話である。職場における会話であるため、本稿では以下「職場会話」とする。

三枝 (2007) は、話し言葉において、もっとも使用頻度の高い「けど」は、発話末で使われることが多く、モーダルな性格を示すと述べているが、これは職場会話に雑談などのインフォーマルな会話が多く含まれるというデータの質的な特徴によるものではないかと思われる。フォーマルな会話においては、現れるかどうかは不明である。

そこで、本稿では、話し言葉であり、かつフォーマルな OPI¹形式のインタビューデータを用い、三枝 (2007) の職場会話と比較しながら、両データにおける「が」「けど」類の使用傾向の差異を明らかにしたい。

¹ OPIとは、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである。(牧野 2001 より)